

Wakayama University Tourism Update

Semiannual Newsletter of Tourism Education & Practice

WTU Autumn/Winter 2026



Contents – 目次 –

1. Reports – 和歌山大学観光学部生の国際 / 地域活動報告 –
2. Topics – 過去のイベントとニュース –
3. Future Events – 今後のイベント紹介 –

■ PATA アワード受賞とマレーシアでの国際交流

井上 紗菜さん（学部3年生／和歌山県立星林高等学校出身）

宮下 咲良さん（学部4年生／飯田女子高等学校（長野県）出身）



観光学部の承認学生団体である PATA 和歌山大学学生支部は、「2026 PATA Chapter and Student Chapter Awards」において、Special Recognition を受賞しました。この表彰は PATA 創立 75 周年を記念し、長年にわたる取り組みと継続的な貢献が認められた支部・学生支部に贈られるものです。

私たちはこれまで、学生同士の交流や企業と連携した企画など、さまざまな活動に積極的に取り組んできました。今年度は特に、団体の知名度向上と活動の幅を広げることを目指し、旅行会社との連携による情報発信や、他大学とのつながりの強化に力を入れています。今回の受賞を通して、現在の活動は歴代メンバーの努力の積み重ねによって成り立っていることを改めて実感し、その活動を受け継ぎ、次の世代へつなげていく責任を感じました。

マレーシアのサラワクで行われた授賞式では、海外の学生支部や PATA 関係者と交流することができました。その中で、日本にも学生支部があることを初めて知ったという声を聞き、活動を行うだけでなく、その意義や成果を国内外へ発信することも重要だと気づきました。

今回のマレーシア滞在では、授賞式に加え、ユースシンポジウムや PATA Travel Mart にも参加しました。ユースシンポジウムでは、滞在2日目に、タイ、インド、マレーシアなどから参加した学生とともに、ボルネオ島の先住民であるピダユ族のコミュニティを訪問しました。伝統的なお菓子作りや、「ケリンカム」と呼ばれる織物の刺繍を住民の方から教えていただき、地域に受け継がれてきた文化に触れる貴重な機会となりました。特にケリンカムは、1mm 幅の平らな金属糸を用いて細かな幾何学模様をつくる高度な技術で、その繊細さと伝統的な価値を実際に体験することができました。日本からの参加者は私たち2名のみでしたが、各国の学生が積極的に声をかけてくれ、多くの友人をつくることができました。午後のローカルスポーツ大会でも、同じチームの学生にルールやコツを教えてもらい、国籍を越えた交流を楽しむことができました。

3 日目には PATA Travel Mart の商談会を視察し、日本支部の出展者の方々とともに交流しました。国際的な観光の商談の現場を知るとともに、PATA 日本支部の活動や今後の展望についてもお話を伺い、意見を交換することができました。

今回の受賞や現地での様々な交流を通して、これまでの学生支部の活動を受け継ぐことの大切さと、その活動や成果を国内外へ発信していくことの重要性を改めて感じました。今回生まれたつながりや学びを今後の学生支部の活動に生かすとともに、私たち自身も英語力やコミュニケーション力を高め、海外の学生との継続的な交流や学生支部のさらなる発展につなげていきたいです。

➡ 関連ウェブサイト（PATA）

<https://www.pata.org/press-release/pata-recognises-outstanding-chapters-and-student-chapters>

■ 観光学術学会第 15 回大会 学部学生ポスター発表 最優秀賞を受賞して

北岡 さつきさん（学部4年生／帝塚山学院泉ヶ丘高等学校（大阪府）出身）

この度、2026 年度観光学術学会第 15 回大会の学部学生ポスター発表において、最優秀賞をいただきました。

本研究は、2 ちゃんねる上で広まったネット怪談の一つである「犬鳴村伝説」が、近年、観光資源としても活用されていることに着目し、怪談が観光地の意味としてどのように生成・伝播していくのかを分析したものです。特に、メディア上でのコミュニケーションと、そこから誘発される現地への訪問が連鎖的に行われることで、観光地としての意味がどの

ように形成されていくのかを考察しました。

この研究のきっかけとなったのは、新書『ネット怪談の民俗学』（廣田龍平著）との出会いでした。遠藤ゼミでは、2 か月に 1 回ほど、観光に限らず興味を持った本を自由に紹介し合う時間があります。その際、偶然この本を見つけ、読み進めるなかで「観光とも結び付けられるのではないか」と考えたことが研究の始まりでした。今振り返ると、観光という枠にとらわれず自由に発想できる遠藤ゼミの環境があったからこそ、このテーマに挑戦できたのだと感じています。

研究では、ネット怪談に関する研究は主に民俗学で行われており、観光学との接点を一から模索する必要がありました。そのため、「本当に観光学研究で扱えるのだろうか」と悩むことも少なくありませんでした。しかし、研究構想を発表するたびにゼミのメンバーから前向きな意見をいただき、遠藤先生からも観光学研究としての切り口について粘り強くご指導いただきました。こうした先生やゼミのメンバーからの温かい応援があったからこそ、研究を続けることができたと感じています。

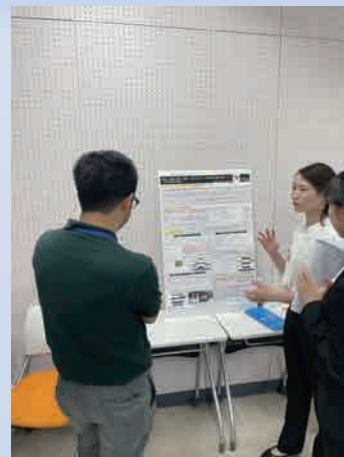
そして、7 月 4 日（土）に立命館大学衣笠キャンパスでポスター発表が行われ、遠藤ゼミからは全員（ポスター発表 10 件）参加しました。発表当日は、ポスターに情報を盛り込みすぎてしまい、内容がうまく伝わるか不安でしたが、発表経験のあるメンバーからアドバイスをいただいたり、後輩たちが発表を聞きに来てくれたりと、多くの方々に励ましていただきながら発表に臨むことができました。

今回の経験を通じて、前例の少ないテーマにも恐れず挑戦することの大切さを学びました。また、研究は決して一人では成り立たず、多くの人の支えによって育まれていくものであると実感しました。

今後は、ポスター発表で研究者の方々からいただいたご助言を踏まえ、卒業論文に向けて研究をさらに発展させていきたいと思います。今回の受賞を励みに、より充実した研究となるよう、引き続き研究に取り組んでいきます。

➡ 観光学部 HP 掲載ニュース記事

<https://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2026070600054/>



■「第 17 回 関西空港・神戸空港発「学生と旅行会社でつくる」海外旅行企画コンテスト」 グランプリ受賞

岩井 なつみさん（学部 3 年生／兵庫県立西脇高等学校出身）

太田 祥吾さん（学部 3 年生／大阪府立千里青雲高等学校出身）

倉本 芽唯さん（学部 3 年生／近畿大学附属和歌山高等学校（和歌山県）出身）

島津 咲希さん（学部 3 年生／開智高等学校（和歌山県）出身）

田畠 歩実さん（学部 3 年生／北海道北広島高等学校出身）

鳥越 遥陽さん（学部 3 年生／岡山県立岡山芳泉高等学校出身）

私たちは、ゼミ活動の一環として「第 17 回関西空港発『学生と旅行会社でつくる』海外旅行企画コンテスト」に参加しました。本コンテストへの取り組みは 2025 年 12 月に始まり、2026 年 6 月の最終審査会まで約半年間にわたって活動を行いました。一次審査までは、このメンバーだけでツアープランを検討しました。一次審査通過後は、株式会社エイチ・アイ・エス関西事業部の皆様との協議を重ねました。実際に HIS 関西事業部のオフィスを訪問し、旅行会社の視点から「お客様に選ばれるツアー」を企画するために必要な魅力や工夫についてご指導いただきました。また、ツアー内容のブラッシュアップだけでなく、審査員に企画の魅力が伝わる効果的なプレゼンテーション方法についても多くのアドバイスをいただき、企画・発表の両面から完成度を高めました。その結果、最終審査会においてグランプリを受賞しました。

本コンテストで提案したツアープランは、メンバーの実体験に基づく悩みから生まれました。それは、普段から筋力トレーニングに励む「マッチョ」の人たちが、旅行中も食事やトレーニングに気を配らなければならない、旅行を 100% 楽しめない





筋力トレーニングを行う方でも我慢することなく海外旅行を満喫できるツアーを企画しました。具体的には、高たんぱく・低脂質の食事を提供するレストランを旅程に組み込み、世界的に有名なジムでのトレーニングや、世界最高峰のボディビル大会「Mr. Olympia」での特別な体験などを盛り込みました。また、ハリウッドやサンタモニカなどの人気観光地も組み込むことで、トレーニングだけでなく海外旅行そのものも十分に楽しめる行程を提案しました。このように、筋力トレーニングと観光の両立という新たな視点から旅行を企画した点が、本ツアープランの大きな特徴です。

本コンテストを通して、大学で学んできたマーケティングやデータ分析の知識を実際の企画立案に応用しました。ターゲット分析では、ゼミメンバーへの聞き取り調査やジム利用者のアンケート調査を基にニーズを分析し、その結果をツアー企画へ反映させることで、マーケティングの考え方を実践的に学びました。さらに、アンケート結果の集計・分析を通してデータ分析の手法への理解を深めるとともに、多くの人の前でプレゼンテーションを行う経験から、相手に分かりやすく魅力を伝える力も身に付けることができました。今回の経験は、大学での学びをさらに発展させる貴重な機会となり、今後の学習や社会で活かせる実践力を身につけることができました。

➡ 観光学部 HP 掲載ニュース記事

<https://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2026062300030/>

■「うみぎわ」がつなぐ、新たな可能性

～地域連携プログラム（LPP）：冷水浦うみぎわ活性化プロジェクト

－海の生業・浜の生活の創生－（海南市冷水地区）

平野 柊都さん（学部2年生／大阪府立寝屋川高等学校出身）



私たち海南市冷水 LPP は「海の生業・浜の生活の創生」をテーマに活動しています。メンバーは、1 年生 12 名、2 年生 1 名の計 13 名で日々活動に励んでいます。海南市冷水は、古くからしらす漁を主とした漁業の集落として知られ、特に冷水港は海南市で一番の自然の良港だとされていました。しかし、臨海の埋め立て事業や漁の操業時間の制限、地域の小学校の閉校など、時代の変化とともに地域と海との関係は以前よりも希薄になっています。また、少子高齢化や空き家問題といった社会課題も顕在化しています。こうした背景を受け、しらす漁や浜のリサーチを行い、企画提案やその実践に向けて取り組んでいます。

1 年目となる今年度は、地域の生活文化や歴史を踏まえ、冷水の魅力や課題を知るための文献調査やフィールドワークを主軸に活動を進めています。文献調査では、写真が付いている年表を参考にすることで、地形の変化や、埋め立ての流れを把握することができました。また、フィールドワークにおいては、地域の方との交流を重視し、積極的なコミュニケーションを行うことで、地域に対して深い理解を得ることができました。特に受入団体の冷水うみぎわ協議会さんが開催している冷水朝市に参加した際には、魚を買いに来られた地域の方や漁師の方にお話を伺うことで、様々な知見を得られました。

現在は、多面的な視点で冷水の魅力や課題を捉えるために、担当班を歴史・文化、浜と漁業、自然、浜・海辺の活用事例の 4 つに分け、各々が魅力向上、課題解決に向けて調査を進めています。また、地域で行われる合宿に向けて準備を進めており、活動報告会に向けた中間発表会や空き家ワークショップ、空き家を活用した浜の拠点のプログラム提案などを予定しています。

これまでの活動で得た大きな学びは、「事前知識を持った上で現地に立つ」ことの意味です。あらかじめ調べた知識を現地で照らし合わせることで、地域への理

解は何倍にも深まります。そして何より、現地に足を踏み入れるからこそデータや数値の裏側や、そこに反映されない人々の思いを知ることができます。データとその思いを踏まえて新たな可能性を模索していくことは難しくもあり、楽しくもあります。「うみぎわ」がつかないでくれた学生と地域の方々とのご縁を大切に、これからも冷水の未来に向き合っていきます。

■ 地域連携プログラム（LPP）：観光・関係人口創出を通じた農ある里山暮らしへの着地 (有田川町清水地域)

林 来春さん（学部2年生／宮崎県立宮崎北高等学校出身）

和歌山県有田川町の清水地域は、国の重要文化的景観「あらぎ島」と、生産量日本一の「ぶどう山椒」で知られる山あいの地域です。昭和30年代に約13,000人だった人口は、現在は約2,000人にまで減っています。「このままだと集落がなくなるかもしれない」という言葉を、地元の方から何度も聞きました。

私は宮崎で育ち、いま和歌山で学んでいます。どちらも好きな場所ですが、共通して感じていたのは「自分の地元を面白いと思っていない人が多いのではないか」ということでした。魅力はたくさんあるのに、住んでいる人自身が「ここには何もないから」と言ってしまう。それがずっと寂しく、外から人を呼ぶ前に、まず中にいる人が自分の地域を面白がれたらいい。そう思って「じもとあい」という活動を始めました。そして、2026年度からは観光学部のLPPとして動いています。

昨年11月には、長く耕作放棄地になっていた畑を耕し、「じもとあいの畑」という名前にしました。2026年5月にその畑に夏野菜のタネと苗を植え、7月にはぶどう山椒の収穫レスキューに参加し、傾斜地で一粒ずつ摘む作業の大変さを知りました。

今年の8月22日～23日には、1泊2日の学外研修に行きました。1日目はじもとあいの畑で収穫をして、採れた野菜と鹿肉、地元のお米のおにぎりを囲んでBBQをしました。長年耕作放棄地だった場所から野菜が採れたことは、とても感慨深かったです。川ではじゃこ釣りも教わり、夜は古民家にみんなで布団を並べて泊まりました。2日目は、ぶどう山椒の畑で、自分たちで考えた「生き物ビンゴゲーム」を行いました。条件に合う生き物を探していく遊びで、楽しみながら畑の生き物を観察し、ぶどう山椒がどんな自然環境の中で育っているのかを実感してもらうことをねらいました。その次に、保田紙の紙漉きや、藁から縄を織う体験をさせてもらいました。この2日間で、地域の方と今まで以上に深く話すことができました。10月には、豆腐やこんにゃくづくりの体験に合わせてワークショップも開きたいと考えています。そこで考えたいのは「この地域がどうなってほしいか」ではなく、「自分たちがどうしていきたいか」です。

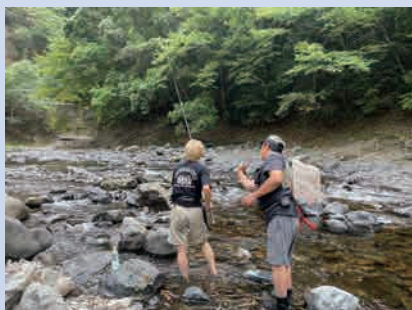
学生のために、これほど多くの大人の方が関わってくださることが本当にありがたいです。この1年でいただいたものは大きく、私たちの活動が清水地域のこれからにとって少しでも役に立つものになれば嬉しいです。



■ 地域連携プログラム（LPP）：山・川・里に根ざした美山の郷土食文化を未来へつなぐ： 食文化の継承と地域学習・体験プログラムの共創（日高川町美山地域）

宮島 理央さん（学部2年生／愛知県立一宮西高等学校出身）

私たちは現在、和歌山県日高川町美山地域をフィールドに、地域連携プログラム（LPP）の活動に取り組んでいます。美山には、イタドリ（ごんぱち）などの山菜、アユやアマゴといった川魚、鹿や猪などのジビエを活用した、地域独自の食文化があります。これらは単なる郷土料理ではなく、豊かな自然の中で暮らしてきた人々が培ってきた知恵や技術、そして自然との関わり方が詰まったものです。



一方で、人口減少や高齢化によって、これまで食文化を支えてきた担い手が少なくなっています。また、山菜の自生量の減少や河川環境の変化など、自然環境の変化も重なり、採取や加工、保存といった昔から受け継がれてきた知恵が失われつつあります。そこで私たちは、美山の食文化を「料理」だけではなく、そこに込められた人々の経験や暮らし、自然との関わりまで含めて記録し、次の世代へつなぐことを目指しています。

現在、私たちの活動は山菜班・川魚班・ジビエ班の3つの班に分かれて進めています。それぞれの班がフィールドワークを行い、山菜、川魚、ジビエに関わる地域の方々や職人の方にお話を伺っています。聞き取りでは、昔の美山の暮らしや食文化についての話だけでなく、実際に使われてきた道具、食材の採取や捕獲の方法、調理方法、加工・保存の工夫など、長年の経験の中で培われてきたさまざまな知恵を教えていただいています。地域の方々にとっては「当たり前」となっていることの中にも、私たち学生から見ると初めて知ることが多く、一つ一つの話が美山の食文化を知る大切な手がかりとなっています。こうした地域の「内なる知恵」と学生の「外からの視点」を組み合わせることが、今回の活動の大きな特徴です。

現在は、フィールドワークで集めた写真や映像、聞き取り内容などの資料を整理している段階です。今後は、それぞれの班で集めた資料を持ち寄り、3つの班が連携して「山・川・里」という視点から美山全体の食文化をまとめたアーカイブ資料を作成する予定です。さらに、その資料をもとに、小中学生など次世代の人たちが美山の食文化を学び、実際に地域を体験できるような文化継承のための体験学習プログラム案の作成にも取り組みます。

活動を通して私たちは、美山の魅力は、目に見える食材や料理だけではなく、それらを生み出してきた人々の経験や思い、自然と共生するための知恵の中にもあると感じています。地域の方々から受け継いだ「大切にしてきたもの」を記録し、次の世代へつないでいく。そんな役割を担えるよう、これからも美山の方々と一緒に活動していきたいと思っています。

■ 学び、挑戦し、つながりを深めた COD プログラム

～海外連携プログラム (GPP) : Leadership and Management in the Hospitality Industry

郷田 聖奈さん (学部3年生／徳島県立池田高等学校出身)

大野 香帆さん (学部2年生／帝塚山学院泉ヶ丘高等学校 (大阪府) 出身)



私たちは、2026年4月から約2か月間、アメリカ・カリフォルニア州の College of the Desert (COD) と和歌山大学観光学部が連携して実施する GPP プログラム「Leadership and Management in the Hospitality Industry (ホスピタリティ産業におけるリーダーシップと経営)」を受講しました。この授業はオンラインと対面のハイブリッド形式で行われ、COD の学生とともに学びました。このプログラムでは、ホスピタリティ業界で必要とされるリーダーシップや、日本とアメリカにおける経営やホスピタリティについての考え方の違いについて学ぶことができました。

参加するにあたり「アメリカの授業に触れてみたい」「ホスピタリティについて英語で学びたい」など、それぞれの動機を持ってこのプログラムに参加しました。授業が始まった当初は、英語で行われる授業についていくことに必死で、自分たちの意見を発言することが難しい場面もありました。しかし、授業が進むにつれて徐々に英語にも慣れ、グループワークなどを通して COD の学生と意見交換ができるようになりました。授業では、実務的な経験に基づいたホスピタリティについて、さまざまな事例やグループワークを通して学び、理解を深めることができました。

また、授業の中では、日本の文化について紹介するプレゼンテーションを行いました。その際、「神社とお寺の違いは何ですか」といった質問を受けましたが、詳しく説明することができませんでした。この経験から、自分たちが日本の文化についてまだまだ知らないことがたくさんあると気づきました。そして、日本の文化を海外の人に伝えるためには、まず私たち自身が日本についてより深く学ぶ必要があると実感しました。

プログラムの終盤には、COD の学生たち 8 名と先生 2 名が日本を訪れました。オンラインで一緒に授業を受けてきた学生たちと実際に会い、楽しく交流できたことは、とても印象に残っています。COD の学生を日本で迎えるにあたり、「どのようなことをすれば喜んでもらえるだろう」とみんなで考えたことも良い経験になりました。話し合いを重ねる中で、私たちは交流イベントとして「ミニ運動会」を企画しました。私たちにあって、小さい頃から当たり前のように経験してきた運動会も、日本ならではの文化の一つであることに改めて気づきました。交流会当日は、COD の学生が楽しんでいる姿を見ることができ、企画して良かったと感じました。

さらに、COD の学生と一緒に高野山や広島、京都を訪れました。オンライン授業では、みんなが真剣に授業を受けている様子が印象的でしたが、実際に会ってみると、とても明るく楽しい人たちでした。一緒にさまざまな場所を訪れ、たくさん話をする中で交流を深めることができ、みんなと一緒に授業を受けることができて良かったと改めて感じました。

この COD プログラムを通して、ホスピタリティに関する知識だけでなく、英語で自分の意見を伝えることの大切さや、異なる文化や考えを持つ人と交流することの楽しさを学びました。また、日本文化について改めて考えるきっかけにもなりました。授業と交流の両方を通して多くのことに挑戦できた、心に残る学びの機会となりました。

➡ 観光学部 HP 掲載ニュース記事

<https://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2026061100013/>

■ 地域と生き、共に未来を創り合う

～サステナブルツーリズムの視点から描く、大熊町の新たな光～

清野 健太郎さん（学部 3 年生／和歌山県立串本古座高等学校出身）

大阪大学福島拠点観光班「ToLoc」は、Tourism と Local を掛け合わせ、2024 年に発足した学生主体のプロジェクトです。和歌山大学をはじめ、大阪大学や福島大学の学生、社会人メンバー約 30 名が参画し、福島県大熊町を中心に、約 2 か月に 1 度の頻度で現地を訪れています。

私たちが大切にしているのは、地域を「観光する」のではなく、地域とともに観光をつくっていくという視点です。東日本大震災とそれに伴う原発事故から復興を歩む大熊町において、①地域の魅力や強みを「発見・強化・磨き上げ・発信する」、②交流や関係人口など「地域を支える人を増やす」、③「地域そのものを多様な学びの場とする」という 3 つの柱を掲げています。外部から大量の観光客を呼び込み、地域を消費するだけの観光ではなく、地域に暮らす人々、地域と関わる人々、そして訪れる人々の双方が豊かになれる、持続可能な地域づくりを目指しています。

これまで、私たちは地域の日常や営みに寄り添うことを大切にしながら、さまざまな活動を行ってきました。町内でイチゴ栽培を行う「ネクサスファーム」のお手伝いや、義務教育学校「学び舎 ゆめの森」の児童との交流、「大熊夏祭り」や「ふるさと祭り」へのブース出展など、住民の方々や現地で活動する皆さんとの対話を重ねてきました。また、大熊の歴史や日常の風景を可視化するデジタルマップの制作・発信にも取り組んでいます。

2026 年 3 月には、国内外 3 大学 33 名（豪タスマニア大学、加トンプソン・リバーズ大学、伊ニッコロクサノ大学、インドネシア アチェ・インド洋研究国際センター、英セントラル・ランカシャー大学、和歌山大学、福島大学、東北大学、山口大学）が参加する観光研修を実施しました。福島第一原子力発電所の視察や国際シンポジウムを通じて、震災の教訓だけでなく、現在進むまちづくりの歩みを複合的に捉えるツアーを企画しました。地域を一方的に「学ぶ対象」とするのではなく、国内外の学生と地域の方々が互いに学び合う、多層的かつ国際的な学びの場を創出しました。

私が活動が続ける中で、最も深く考えるようになったのは、被災地における観光のあり方です。地域の姿の中には、ただ眺めているだけでは伝わらないものがあります。自分の目で見て、触れて、足で歩いて初めて、その地域の姿が見



えてきます。大熊町でさまざまな人と出会い、足がくたくたになるまで町を歩き、住民の方々の日常の営みに触れる中で、私はそのことを強く実感しました。

観光を学問として学ぶ私たちは、観光を単なるレジャーや消費のための産業として捉えるのではなく、地域と人、人と人をつなぐ幸せの営みとして改めて考える必要があるのかもしれません。観光には、地域を訪れる人だけでなく、そこに暮らす人や、地域と関わり続ける人の視点も必要になってきます。今後は、GISを活用したさらなる周遊ルートの提案や、福島拠点の他班との連携、「観光のまなざし勉強会」シリーズの継続など、地域の資源と私たちの機動力を生かした実践をさらに進めていきます。

大熊町の皆さんと同じ地域を歩き、考え、学びながら、地域と外部をつなぐ存在となることに、持続可能な観光のあり方が見えてくると考えています。これからも私たち ToLoc は、大熊町の皆さんとともに歩みながら、新しい観光の可能性に挑戦していきます。

➡ 観光学部 HP 掲載ニュース記事

<https://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2026063000014/>

Topics -過去のイベントとニュース-

■「ツーリズム EXPO ジャパン 2026」に出展しました



2026 年 9 月 24 日（木）～ 27 日（日）、東京ビッグサイトで開催された、旅の未来を感じる総合イベント「ツーリズム EXPO ジャパン 2026」に、和歌山大学観光学部が出展しました。

今回は、ブースでの学部・大学院（博士課程、専門職学位課程）の教育・研究活動の紹介に加え、株式会社阪急交通社との共同企画「【和歌山大学 × 阪急交通社】地域の課題解決に挑む、新しい産学連携のカタチ」や PATA セミナー「太平洋アジア観光協会の歴史と役割、そして未来へ」、ステージイベント「地域と自然を豊かにする観光の未来—和歌山大学観光学部の挑戦」への登壇などで、本学部の学生・教職員による PR を行いました。

➡ 観光学部 HP 掲載ニュース記事

<https://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2026080700065/>

Future Events -今後のイベント紹介-

■「2026 年度 和歌山大学『観光・地域づくり』講座（オンライン）のご案内



2008 年度の学部設立以来、毎年実施している公開講座を今年度も実施します。

本公開講座では、観光に関わる様々な分野で活躍する講師陣をお招きし、独自の着眼点を生かした事業の推進、多様な関係者との合意形成、異分野・異業種との連携などの実践事例を通して、和歌山県をはじめとする地域の観光振興とまちづくりの新たな方向性を探ります。

今回も Zoom のウェビナー機能を利用したオンライン公開講座（ライブ配信）として実施いたします。参加申し込みは、各回開始 1 時間前まで受け付けています（ただし、定員に達し次第受付を終了します）。

皆さまの聴講をお待ちしております。

➡ プログラムや参加申込方法などは、観光学部 HP 掲載ニュース記事をご覧ください。

<https://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2026090400023/>

編集・発行

(2026 年 10 月発行)

和歌山大学 観光学部 観光実践教育サポートオフィス

〒640-8510 和歌山市栄谷 930 和歌山大学西 4 号館 K216 室、K206 室

TEL 073-457-8553 / E-mail tourism-er@ml.wakayama-u.ac.jp / URL <https://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/>

* 本誌は Web ページからも閲覧できます→<https://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/fuzoku/tourism-education-research/wtu.html>

